

世界が舞台の仕事

三菱商社といえば日本のみならず海外にも二百近い拠点を持つ日本を代表する会社です。

私は今回社員の方もなかなか入ることのできない丸の内のビルに入らせていただき社員の方のお話を伺うことができました。総合商社とは投資を通じて日本と世界の会社をつなぐものです。そして、それは日本人のチームワークがあるからこそ成り立つもので、ほかの国にはまねできません。

今回は三名の社員の方に、モザンビークでのアルミ工場と鮭の養殖、石油の事業のお話をさせていただきました。モザンビークのアルミ工場には四つの国の会社関わっています。三菱のほかにも、アルミ精錬の技術があるオーストラリアの会社、アフリカの事業なので南アメリカ共和国の会社、そしてモザンビーク政府です。この一つの事業にこんなにたくさんの国が関わっていることに私は驚きました。しかしそれよりも、高校生の私の心に残ることがありました。

それは、三名の社員の方が学生時代に部活動を熱心にされていたことです。部活動をすれば社会に出た時役に立つと散々言われてきましたが、社員の方のお話をお聞きしてその意味が分かりました。そして、ドイツに留学された社員の方がおっしゃっていた「やるかやらないか迷ったら挑戦すること」「世界の中の日本を意識すること」「自分と違うことを受け入れること」これらの言葉はまさに高校生の私に当てはまることだと思いました。この日のお話を伺って高校生である私には、たくさんの知識や文化に触れて見分を広めたくさんのことのチャレンジすることが大切だと思いました。これからの高校生活は積極的にチャレンジして将来自分がしたいことを見つけたいです。

心を診る仕事

「漫画で分かる心療内科」という本を私は数か月前たまたまインターネットで知りました。それは読んで字のごとく、心療内科の先生が心療内科の世界を漫画で面白くそしてわかりやすく描いている本です。しかし、その時私は特にその漫画を読むこともなく「こんな人もいるのか」とこれくらいにしか思っていませんでした。

しかし、高校生になり私は東京研修でその先生とお会いすることになりました。そこで私は改めてその漫画を読んでみました。この漫画の作者であるゆうきゆう先生は心療内科でありながら、漫画や心理学についての本を多く出版されています。そこで私は大きく分けて三つの質問をしました。

一つ目は、心療内科のことについてです。ゆうきゆう先生のお話では、心理学を学ぶことによって自分が悩んだり、悩みを相談された時の対処方法や物事を考えやすくなったりするそうです。いくら体が健康な人でも悩みが全くない人はめったにいないのではないのでしょうか。そういった意味では心理学や精神内科とは案外私たちの身近にあるものなのだと思います。

もう一つは、漫画についてです。先生が心療内科をされながらなぜ漫画を描こうと思ったのか伺いました。先生は漫画が好きで大学でも漫画研究会に入られていたそうです。たしかに漫画だとインパクトが強く面白く読める

ため私のように本を読むのが好きではなかったり、心療内科にあまり興味がなかったりする人でも気軽に読めると思います。心療内科についてよくわからないと思っている人はたくさんいると思いますが、この本が私のように少しでも心理学や心療内科について興味を持つきっかけになればと思いました。

最後は、学習についてです。私は将来医師を目指しています。ですので、東京大学医学部を卒業されたゆうきゆう先生からお話伺えることは私にとって大変貴重な機会でもありました。先生はご自分では勉強した量こそ普通とおっしゃっていましたが、一問をじっくり説くのではなく、いろんな参考書や問題集をひたすら読まれていたそうです。

心理学を織り交ぜた先生のお話はとても説得力がありました。たとえば、悩みや反省の時間が少ない人ほど前向きでいられるそうです。ですので、先生は反省や悩みは六秒までにしているそうです。何も生まない悩みや反省はしないで行動を起こすことや、無駄な時間を過ごさないこと。それが自然と勉強量の差を生んでいくのではないかと私は思いました。私の日々の学習を振り返ってみると確かに悩みすぎたり集中しないまま勉強したりしていることが多いと思います。そのようなゆうきゆう先生の考え方はぜひこれ方も私の生活にも取り入れていきたいと思います。

東京大学に行って感じたこと

七月に東北大学のオープンキャンパスに参加したとき、生徒が一方的に学ぶ高校までとは違い自ら進んで学び研究をする大学生の姿にあこがれのようなものを感じました。私は、その日から東京研修へ行くまで、東北大学であれだけの衝撃を受けたのだから東京大学というところはいったいどのようなところなのだろうかと考えていました。

東京に到着した日の夜、東京大学を訪れる前日に仙台二高を卒業して東京大学に入学された先輩方との懇談会がありました。そこで東大生への驚きとともに、私が持っていた、東京大学とはどのようなところなのかという思いはより一層強くなりました。はじめの自己紹介で世界一周した先輩や会社を立ち上げた先輩が来てくださったとわかり、東大生のすごさを感じました。

たくさんのお話をさせていただいた中である二高生が「参考書は何を使っていましたか」という質問をしました。この質問はとてもよく聞く質問で私もこれまでいろんな人にしてきました。しかし東大生の先輩は今までとは少し違った答えで「成功した人がしたことをそのまま真似するのではなく、自分の課題をしっかりと分析してこれを解決するためには何が必要かを絞っていくことこそ大切な能力である」と答えてくださいました。また、別の先輩からは「大学を選ぶとき自分が何に興味があるのかをひたすら考えること」というアドバイスをいただきました。

次の日、東京大学を訪れた私はまずその広さに圧倒されました。そして次に目に飛び込んできたのは、歴史を感じさせる建物の数々でした。東京大学が誕生したのは一八七七年で、日本の近代的な大学としては最も古く、安田講堂は一九二五年に竣工しその後いくつかの改修を経て今にいたり、登録有形文化財にも指定されています。

このような長い歴史を持つ東京大学で私は模擬講義を受けてきました。講義はとても興味の持てる内容で、わかりやすく説明していただきました。また、講義を受けている生徒の意欲も素晴らしかったです。東京大学は日

本全国からこの大学で学びたいと思っている人が集まっています。ですので、私は学びたいと思う者にとって東京大学は最高の環境であると思います。

この二日間にかけて、先輩からお話を伺ったり東京大学オープンキャンパスに参加したりして、やってみようとする意志や、やり遂げようとする意志を感じました。起業した先輩や世界をまわった先輩、東京大学で学んでいる先輩方は決して生半可な意志でそれを成し遂げたわけではないと思います。私は今高校一年生です。まだ高校一年生だと思わずに、もう高校生なのだから、自分の将来を見据え興味のあることをこれからの三年間で追及していきます。そして、それをするにもっともふさわしい大学を選びたいと思います。

